

## 白岩焼の調査資料集成Ⅱ

### －押印のある破片資料－

庄内 昭男\*

#### 1. はじめに

白岩焼は、昭和8（1933）年に刊行された『白岩瀬戸山』、昭和56（1981）年に刊行された『北国の陶磁器』などでその特徴が語られている。日常的に使用した雑器が大部分であるが、成形が丁寧で化粧や釉薬もきれいに施されているものが多いことから、工芸品として好事家の手にあるものも多く、明確な分類基準を設定しないまま、感覚的に白岩焼とされてきたものが多い。とくに、県内外の資料館の収蔵品の記載例をみても秋田県内産の檜岡焼や山形県産の大宝寺焼などが白岩焼として分類されているのが現状である。

江戸時代末期の六窯期には製品の出自を明らかにするように、製品に印が付されており、開窯の順序にイからホの窯が区別されていたことが知られている。ただし、物原などの採集品などをみても生産されたもの全てに印が付されていたものではなく、数に限りがあるのは確かであるが、その理由がはっきりしない。

そこで、印のある資料をもとに、技術的特徴を引き出すことができないか常々考えていた。白岩焼の個人収集家の所蔵品調査に入った時に、大潟村の石原琢也氏が印をもつ破片資料を収集しており、それらを公表することに前向きであり、まとめられる可能性が高まっていった。石原氏は、白岩焼を確かめることを目的に30年ほど県内産のやきものの収集に努めており、破片資料もその収集品の一部である。さらに平成8年4月の窯跡調査にともなって新たに印がある破片が採集されたこと、「白岩焼」展の開催に合わせて、かつて館職員が採集したものを洗浄・整理して行く過程でも印がある破片が見つかり、さらに数点が加えられることとなった。

#### 2. 押印と印譜帳の存在

これまで『白岩瀬戸山』などでは、その印を刻印という呼び方をしており、イ・ロ・ハ・ニ・ホの各窯跡と関連していることが知られていた。近年、地元の中田達男氏によって、角館町の印判師が自ら製作した判子を印譜帳としてまとめており、その中に白岩焼の印があることが確認された。そこで安政五年・安政六年・元治元年の三段階での印と各窯との関係が知られることとなった。なお、この印をもとに1991年には樺細工伝承館において「刻印のある白岩焼」展が行われた。

ところで、印が判子によるものだということが確認されたことから、一般化する意味でここでは押印と呼んで行きたい。

\*中田氏がまとめたものを表にすると以下になる。

安政五年 {イ直 賢 弁 為}  
(1858年) {ロ亀 吉 喜}  
{ハ政 鉄 松 吉}  
{ニ政 貞 兼}  
{ホ多 伊 金}

-----  
安政六年 {ニ瀧 二兼}  
(1859年) {ハ鉄 ハ長 ハ吉}

-----  
元治元年 {イ賢}  
(1864年)

#### 3. 破片資料の紹介

説明を三項目に分け、＜押印の位置＞では、収集品や採集資料の底部のどこに押印があるのかを記した。また、技術的特徴をできるだけ詳細に注釈することを目的に＜成形と調整＞では、底部の形や高台の状態を＜内外面処理＞では、化粧および釉薬（註参照）の詳細を説明した。

\* 秋田県立博物館

a. 素焼きの製品に残った押印

①「楕円枠内に口亀の文字」1989年9月窯跡踏査において、口窯跡周辺から庄内が採集した。

〈押印の位置〉高台の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

〈成形と調整〉甕の底部と思われる。高台は1.9cmと幅広で、外縁にそって幅5mm前後の削り調整が加えられている。内側の底はていねいに磨き調整されている。

②「楕円枠内にニ瀧の文字」石原氏の収集資料である。

〈押印の位置〉高台内側の台に近い位置に付されている。

〈成形と調整〉甕の底部で、内側の底面はナデられている。外側の底辺には削り痕跡が残る。高台の幅は1cmで、内側を直角に削り調整されており、その内底面はナデ仕上げされている。なお、高台外縁は面取りされている。

③「楕円枠内にニ政の文字」石原氏の収集資料である。

〈押印の位置〉底辺に近い体部下位に付されている。底を下にして置いた場合文字の「ニ」が上位にあり、「政」が下位で、文字配置は口を上にした時に正位になっている。

〈成形と調整〉甕の底部で、外側体部から底辺までケズリ痕跡が残る。底面内側を深さ8mm前後削った後に高台内をナデ調整している。高台の一カ所をくぼませており、えぐりの深さは底面まで達

している。内側の底面はナデ調整されている。

④「吉が一字」2007年窯跡踏査の際、ホ窯跡南側の平坦面で庄内が採集した。

〈押印の位置〉高台の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

〈成形と調整〉甕の一部と思われる。表面の高台との境は線で区別されている。高台は深さ6mmで削った後に内側をナデ調整している。えぐり込みは指押さえによると思われる。外側の体部と内側の底面がともに丁寧なナデ調整されている。

b. 化粧や釉薬が施された製品に残った押印

⑤「楕円枠内にイ賢の二字」石原氏の収集資料である。

〈押印の位置〉高台内の底面に付されている。

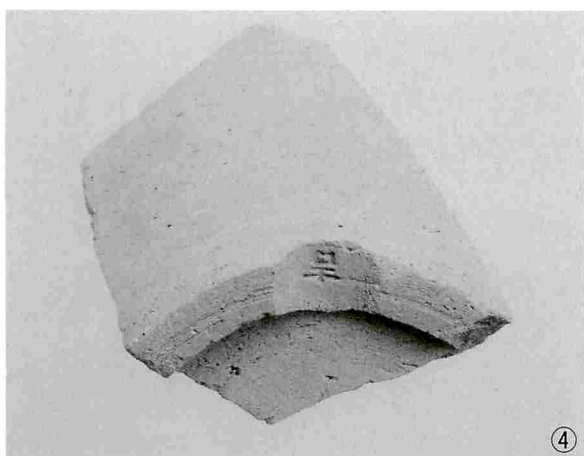
〈成形と調整〉外側底辺との境は線状に凹む。高台外縁をすこし削って面取りしている。

〈内外面処理〉小甕と底部と思われる。外面は畳付を除いて化粧が施され、光沢のある暗褐色を呈している。内面は釉薬がかかり、青白色を呈している。

⑥「楕円枠内に口亀の二字」前館職員による採集資料である。

〈押印の位置〉高台の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

〈成形と調整〉甕の底部である。成形後に底面をケズリ調整して上げ底状にしたものである。高台は深さは8mm、えぐり込みは深さが底面にまでい



たり、指頭押さえによるものと推測される。

＜内外面処理＞畳付きを除いて光沢のある赤褐色の化粧が施されている。

⑦「楕円枠内に口亀の二字」前館職員による採集資料である。

＜押印の位置＞底辺の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

＜成形と調整＞甕の底部と思われる。成形後に底面をケズリ調整して上げ底状にしたものである。高台は深さは8mm、えぐり込みは深さが底面にまでいたり、指頭押さえによるものと推測される。

＜内外面処理＞畳付きを除いて光沢のある赤褐色の化粧が施されている。

⑧「楕円枠内に口亀の文字」1989年9月窯跡踏査にともなって、口窯跡の周辺から庄内が採集した。

＜押印の位置＞高台の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

＜成形と調整＞底面に小孔が複数みられることから湯通し甕である。高台は1.2cm前後の幅があり、高台内側は深さ8mmで直角に調整している。えぐりこみは底面まで達していない。

＜内外面処理＞破断面は灰白色を呈している。体部外面は半光沢の赤褐色に化粧されているが、畳付きを含めて外側底面は素地のままである。内側にはうすい青色の釉薬が掛かっている。

⑨「楕円枠内に口亀の二字」前館職員による採集資料である。

＜押印の位置＞底辺の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

＜成形と調整＞甕の底部と思われる。成形後に底面をケズリ調整して上げ底状にしたものである。高台は深さは8mm、えぐり込みは深さが底面にまでいたり、指頭押さえによるものと推測される。

＜内外面処理＞畳付きを除いて光沢のある赤褐色の化粧が施されている。

⑩「楕円形内に口下の二字」前館職員による採集資料である。

＜押印の位置＞高台の一カ所をくぼませたえぐり込みに付されている。

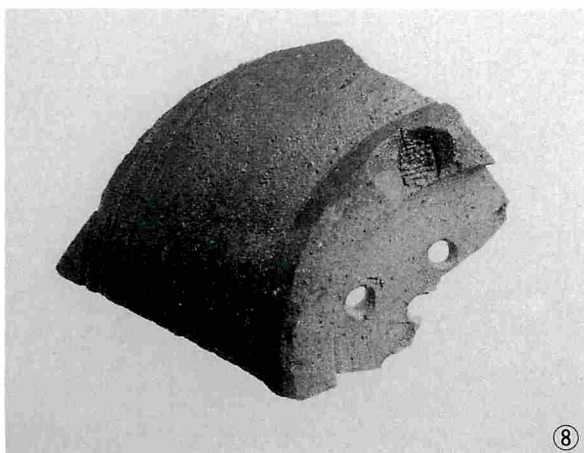
＜成形と調整＞すり鉢の体部から底部にかけての破片である。底辺と高台との境は線がひかれ判然としている。高台は外縁に5mm幅で面取りされている。

＜内外面処理＞破断面は下位が肌色であり、上位は黒褐色である。畳付きを除いて、外面はうすく施された化粧が変化して赤褐色となっている。内面は幅2.5cmの卸目が引かれており、赤褐色の化粧が施されている。

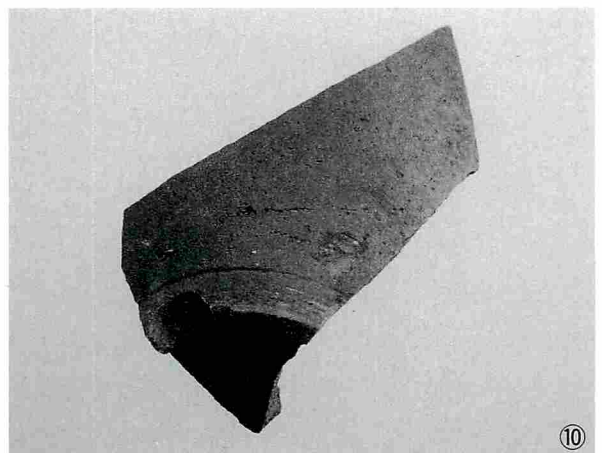
⑪「楕円枠内に二瀧の二文字」石原氏の収集資料である。

＜押印の位置＞高台内底面、高台に近い位置に付されている。

＜成形と調整＞鉢の口縁部から底部である。高台と底辺の境は判然としており、幅が1.2cmの高台が付帯しており、外縁は3mm幅で面取りされている。



⑧



⑩

る。

<内外面処理>体部から高台内までは、化粧が施され暗褐色を呈している。内側の全面と外側の口縁から体部下半は、青白色の釉薬が掛かっている。

⑫「楕円形内にニ瀧の二文字」石原氏の収集資料である。

<押印の位置>高台内底面、高台に近い位置に付されている。

<成形と調整>甕の底部である。高台と底辺の境は判然としており、幅が2 cm 前後の高台が付帯しており、外縁は5 mm 幅で面取りされている。

<内外面処理>外側は、光沢ある暗褐色の化粧が施され、高台と底面は光沢がよわい。内側の底面全体には灰青色の釉薬が掛かっている。なあ、足付ハマの痕跡が4点確認でき、外側にも底辺にそって粘土塊の付着した痕跡が確認できる。

⑬「楕円枠内にニ瀧の二文字」石原氏の収集資料である。

<押印の位置>高台内底面、高台によった位置に付されている。

<成形と調整>鉢の底部とみられる。幅8 mm の高台が付帯しており、高台内側を直角に仕上げ、外縁をケズリ調整し、面取りしている。

<内外面処理>内側は素地のままであり、外側は半光沢の暗赤褐色の化粧が施されている。

⑭「楕円枠内にニ瀧の二文字」石原氏の収集資料である。



⑫

<押印の位置>高台内底面の高台によった位置に付されている。

<成形と調整>鉢の底部の破片である。高台と底辺部との境は判然としている。高台の内側も直角にケズリ込まれている。外縁に面取りがあるが、やや丸みがある。

<内外面処理>内側は青灰色の釉薬がかかり、外側底辺から高台内は半光沢の化粧が施され、赤褐色を呈している。

⑮「楕円枠内にニ瀧の二文字」石原氏の収集資料である。

<押印位置>高台内底面の高台によった位置に付されている。

<成形と調整>断片であり、器種は判然としない。高台の内側は直角である。高台の外縁は幅5 mm で面取りされている。

<内外面処理>内外側ともに半光沢の化粧が施されている。

⑯「楕円枠内にニ瀧の二文字」石原氏の収集資料である。

<押印の位置>底面の外縁に近い位置に付されている。

<成形と調整>小甕の底部とみられ、底部内側を削って上げ底状にしている。

<内外面処理>畳付を除いて赤褐色の化粧が施されている。

⑰「楕円枠内にニ兼の二字」石原氏の収集資料で



⑭

ある。

＜押印の位置＞外側の底辺に近い位置に付されている。

＜成形と調整＞甕の底部である。底面の内側をケズリ調整して上げ底状にしている。高台は深さ8mmで、内側をほぼ鋭角に削っている。

＜内外面処理＞畳付を除いて光沢のある赤褐色の化粧が施されている。なお、内側の底面に足つきハマの痕跡が残っている。

⑱「為の一字」2008年4月、イ窯の上面捨て場から庄内が採集した。

＜押印の位置＞底辺の外側に付されている。

＜成形と調整＞高台が付帯しており。高台の内側はきっちりと削り調整され、外縁も面取りされている。

＜内外面処理＞内外ともに光沢があり、にぶい赤褐色と黒褐色がまだら状になっている。なお、足付ハマの痕跡が1カ所残っている。

⑲「為の一字」石原氏の収集資料である。

＜押印の位置＞底面の高台に近い位置に付されている。

＜成形と調整＞線香立とみられる。外側の底辺を削り、削りは高台外側までおよび、やや斜めに削り込まれている。高台内面はナデ調整されている。

＜内外面処理＞内側は暗赤褐色の化粧が施され、口縁から体部底辺まで、オリーブ灰色の釉薬がかかっている。なお、釉薬の下地には暗赤褐色の化粧が見える。高台を含む外側底面は、素地のまま

である。

⑳「弁の一字」2008年4月、イ窯の上面捨て場からの庄内が採集した。

＜押印の位置＞高台内底面に付されている。

＜成形と調整＞器の種類は判然としない。畳付きの幅が8mmの高台がついている。高台内側の境がはっきりしている。

＜内外面処理＞内側底面に灰白色の釉薬が掛かり、気泡が抜けた跡が見える。足付ハマの痕跡が三点ある。外側は畳付を除いて光沢のある赤褐色の化粧が施されている。

㉑「弁の一字」石原氏の収集資料にある。

＜押印の位置＞高台内底部の台に近い位置に付されている。

＜成形と調整＞鉢の底部とみられる。外側は素地のままであり、高台の外側と内側を削り調整した痕跡が見られる。高台内側は1cmの深さがある。外縁は幅2mmで面取りされている。

＜内外面処理＞内側底面に灰青色の釉薬が掛かり、気泡が抜けた跡が見える。なお足付ハマの痕跡が2点ある。

㉒「吉の一字」前館職員による採集資料である。

＜押印の位置＞高台内側の底面に付されている。

＜成形と調整＞すり鉢の体部から底部にかけての破片である。底辺と高台との境は線がひかれ判然としている。幅1.4cmの高台が付帯しており、高台の内側は深さ6mmで底面とは垂直である。なお、



⑲



⑳

高台外縁は5mm幅で面取りされている。

＜内外面処理＞破断面は黒褐色である。畳付を除いて、外面は半光沢の化粧土が施され、赤褐色となっている。内面は幅2.5cmの卸目が引かれ、うすく赤褐色の化粧が施されている。

②③「貞の一字」石原氏の収集資料である。

＜押印の位置＞体部外側の高台近くに付されている。

＜成形と調整＞底部の断片であり、器種は判然としない。高台と底辺の境ははっきりしている。高台内側と底面は直角になっている。

＜内外面処理＞外側体部は光沢ある赤褐色の化粧を施しているが、畳付と高台は拭きとっている。内側底面は青白色の釉薬が掛かっている。

#### 4. まとめ

個々の破片について記録したものから、項目毎に特徴をとらえて以下にまとめた。

＜押印の位置＞二文字を重ねた押印のあるものについて。口窯の生産品は、高台の一カ所をくぼませたえぐり込みに付しており、二窯の「瀧」印は、高台内の底面に付している。一文字のものをみると、「吉」は高台のえぐり込みであったり、「為」は底辺部に付していたり、規則性がみられない。

＜成形と調整＞高台を設けたものが多く、高台内側をほぼ垂直に削っており、高台外縁にはさらに面を取るよう削りを入れている。甕の中には底部の中を平らに削って上底にしたものがある。

＜内外面処理＞底部の外面は褐色を呈しており、

化粧土を塗り込んで焼成したものである。⑤のすり鉢は内外面ともに茶褐色であるが、卸目がつぶれないように刷毛塗りしたものである。甕は光沢がある化粧が厚くかかっている。⑮では化粧土が釉薬の下地に使用しているのが見える。なお、甕の内側には釉薬として白から青白色に変化するわら灰が使われている。

内側の底面では小さく円形のくぼみがあったり、ハマの足が付着した痕跡がある。これまでイ〜ハの窯跡で陶磁器・窯道具・煉瓦破片にいたるまで採集に努めてきたが、ハマはいずれも先がとがった足付ハマであり、焼成後もその痕跡が残ったものである。

最後になりましたが、快く資料を提供していただきました石原琢也氏に感謝申し上げます。

#### {参考文献}

1979年 『白岩瀬戸山』（復刻版）

2007年 秋田県教育委員会 あきたの工芸

註) 化粧および釉薬については、由利本庄市の古木保雄氏からご教示をいただき、それをもとに破片資料に注釈を加えた。光沢のあるものと半光沢のものに区分したが、光沢のあるものは、化粧土に浸した場合が、半光沢は刷毛塗りである可能性を指摘された。また、光沢のあるものについてはわら灰の混入の可能性も指摘された。



